KAZOKU
家族
I

姉と弟

表紙イラスト　根無　亮

目次

若者 9
十五年前 12
黒い大きな森 16
ジェームス・ケンジントン 18
恐ろしい森 20
森で暮らし始める 27
不安の中の小屋作り 29
クロフォード 32
森の小屋 38
ケンジントン公の館 41
冬の生活に備えて 46
初雪 48
森からの遠出 54

オリバー・ローレンス卿 57
幼いアーサー 66
長い夜 68
森からの贈り物 72
五年の月日が流れる 79
リディア王妃、森の外に出る 82
王妃の城館 92
再び森へ 95
森の中での教え 100
十一年の歳月 105
王妃の告白 110
王妃の旅立ち 116
ケンジントンへの手紙 118

勇者になるために　122
アーサー、初めて森から出る　124
ベネディクト神父　130
ローレンス卿の館で　138
ジョン王の治世　145
父、ウイリアムの大切な教え　148
新しい未来に　152
ジョン王の意志　156
権力者、宰相イシューリン　158
似顔絵　160
もう一枚の似顔絵　163
アン王女と教育係シルヴィー　168
ジョン王と宰相イシューリン　172
あやしい二人連れ　174
その翌日　176
王妃を捜す旅　182
シルヴィーの兄　189
ケンジントン公の手紙　194
アン王女は何も知らない　198
イシューリンの陣頭指揮　200
ケンジントンの病　203
シルヴィーの怒り　206
アーサーとモーリス　209
捕らわれるベネディクト神父　213
アンとシルヴィー　217
捕らわれる王妃　225
宰相の尋問　234
母の行方　239

シルヴィーの冒険 243
逃避行 246
フレデリックの展望 250
追跡 252
王妃はどこに 254
追いつめられる王と王妃 256
イシューリンの告白 258
歓喜 262
森の親方 271
ジョン王を支える人々 272
ベネディクト神父の釈放 274
アンの手紙 278
歓喜の晩餐 283
レスター 287
アンの苦しみ 301
イシューリンの過去と謀略 303
兄と弟 306
神父とアーサー 308
懐かしい森の小屋 312
アーサーの知らせ 316
アンは神に祈った 319
姉と弟 321
ジョン王の落胆 328
再びケンジントンの館 330
幸せなアン 333
家族 338
その後 343
あとがき 350

登場人物

アーサー	この物語の主人公
リディア王妃	アーサー、アンの母
ウイリアム王	アーサー、アンの父
アン王女	アーサーの姉
ケンジントン公	ジェームス・ケンジントン、リディア王妃の叔父
アンナ	リディア王妃の乳母、女官
ジョン王	ウイリアム王の弟
イシューリン	ジョン王統治時の宰相
クロフォード	ケンジントン公の従僕
モーリス	クロフォードの次男
ハリー	クロフォードの長男
ベネディクト神父	ローマ・カトリックの神父
ジャン修道士	ベネディクト修道院の若い僧

オリバー・ローレンス卿	ケンジントン公の親友、領主、騎士
ローザ・ローレンス	オリバー・ローレンス卿の妻
ヘンリー・ローレンス卿	ローレンス卿の長男
シルヴィー	アン王女の教育係
フレデリック	シルヴィーの兄、聖書研究家
セント・ジョン	ジョン王配下の兵
レスター	森の親分、レスター公
マリア	レスターの妻
ソフィー	大陸からきた乙女

ケンジントンの二人の娘	サンダー 馬の名	ハッピー 犬の名	
イシューリンの大隊長	ビクター 馬の名	ビッグ 犬の名	
二人の泥棒	メリー 馬の名	リトル 犬の名	
レスターの部下、小頭、ビルとジョン	ジャンボ 馬の名	スノー オオカミの名	

若者

夏の終わりを告げるかのように、その日の雷雨は辺り一面のほこりを一掃するほど強く地面をたたいた。乾いた大地の至る所に大きな雨粒が痕跡をつけ、やがて大地からは涌いたように小さな流れが現れた。小さな水勢はさらに大きな流れに呑み込まれ、街道は大きな水たまりがあふれた。人々は樹々の下や小屋の中に逃げ込み、この突然の雷と大雨をやり過ごそうとした。やがて暗い雲の隙間から陽が射しはじめると、雨ははらはらと小さな粒にかわり、勢いよく流れていた雨水の流れも地面に消えていった。そしていつも通り田畑は十分な水を得、昆虫は明るい陽射しにむかって飛び交い、大小の鳥たちも鳴きはじめた。村はうるおい、人々は外に飛び出し、街道にも行き交う人々が現れた。

田畑の先に森や丘が連なり、はるか遠くに石造りの城館が見える景色が夕暮れの中にあった。

青く暗い水をたたえた堀がその城館の周囲を囲んでいた。堀のある石造りの城館は、この地ではきわめてめずらしくもあったが、その夜、かすかな月あかりの中、ひとりの若者が堀の水に手を浸し、やがて用心深く、音もなくゆっくりとその身を堀に沈めていった。

若者は城館に向かってゆっくりと泳ぎはじめた。衣服をつけたまま、しかも水草がその手足にまとわりつくが気にする様子もなく……。

若くしなやかな体躯に、強靭な精神が若者の泳ぎのなかに読み取れる。両腕を大きく前方にのばし、強い腕力で水を柔らかく後ろへかくが、水音はかすかにするくらいだ。このような優れた泳ぐ技をどこで手に入れたのだろう。暗闇の中、見えない波紋がしだいに城館に近づく。

若者は何者でなぜこの城館に来たのだろうか。はっきりとした目的をもっていることは明らかだった。なぜならこの城館は王の別館であり、捕まれば、それは確実な死を意味していたからだった。

この堀に身を沈める数時間前、若者は大きな森から出てきた。服装は麻のチュニックに、薄いなめし革の脚衣、素足にゲートルを巻き、足もとは丈夫な革製の短靴を履いていた。長剣を腰に吊し、背中に弓と矢、左腰に短剣、胸元には葦で作った笛を差し、スエード皮の帽子をかぶっていた。

陽が落ちはじめる少し前、若者はこの城館から近い丘の上から四方を用心深く眺めていた。その横顔は端正で、瞳は澄み、口元に優しさがあった。そしてこれから、決行することがいともたやすいのではないかと思われるほど落ち着いた動作で、胸元から葦の笛をとりだし、おだやかな調べを奏でではじめた。

やがて数匹のコウモリが城館のまわりを飛びはじめた。

若者は数日前まで旅をしていた。母を捜す旅だったが、道中は葦笛や草笛を巧みに使い、町や村の

広場で森の小鳥たちをまねた調べを奏でた。そして、時には弓できわめて小さな的に当てる技も披露した。村の子供たちはいつも彼の回りに集まり、若者の語る物語に耳を澄ました。遊んでくれる子供たちへのお礼にと、親たちからパンを得ることもあった。

寝る時は宿もとるが、野宿することも多く、それは少しも苦にはならなかった。干し草の中で思いっきり手足を伸ばして眠ることは爽快だった。若者は幾分長身のためか実際の歳より大きく見えた。

そして、若者が音もなく泳ぐこの城館の堀は、十五年前、この地で起こったこの物語の発端となる大きな事件を知っていた。

十世紀後半、大ブリテン島（イングランド）では七つの王国が次第に集約され、イングランド王国が成立していた。しかし、統治力の弱さから、各地の領主たちが再び覇権を競いはじめていた。この頃、大ブリテン島の中部より北の地、ヨークから南西に馬で二日の地に唯一のケルト系ブリトン人が支配する国があった。この物語の登場人物の舞台となるブリトン王国である。

十五年前

十五年前、太陽が西の黒い森に沈んでから間もなくのこと、松明をかかげ、覆面をした騎士団がこの堀のある城館を囲みはじめた。

城館は、この国の王、ウイリアムの別邸だった。ちょうどこの時、館の中では、大きな燭台に照らされて、王妃リディアを中心に、二十名以上の会食者が食卓を囲んでいた。その多くは王から領地を封じられた領主や騎士、それに僧職の者たちだった。

なごやかな会食も進んで、別室の広間では食後に行われる吟遊詩人の詠唱、楽士によるリュートやロート（ケルトの五弦のハープ）の演奏などが始まろうとしていた。そして会食者たちが広間に移りはじめ、最初のロートの音色が奏でられたその時、あわただしく、蒼白な顔をした王妃付きの近衛の兵が広間に駆け込み、起こりつつある出来事を大声で報告した。

「王妃さま、大変です。敵です。敵が城を取り囲んでおります」

「なんと言いました？」

「王妃さま、敵です。敵が城館に侵入してきました」

「敵？　一体誰？　何なのそれ？」

「わかりません。覆面をした騎士の一団です。城館に火を放ちはじめました」

「何ですって！」

その兵士の言葉が理解されるや否や、会食者、楽士、吟遊詩人、召使いたちは気が動転し、四方八方に飛び出したが、女官たちは武器をとり、王妃リディアの元に参じた。

領主や騎士、それに王妃を守る近衛の兵も、すばやく武器を取り、防御態勢に入った。

すさまじい怒号と剣と剣の打ち合う音が、しだいに広間に近づいてきた。

〝王妃さま、ご無事で！〟という声もかき消される中、何人かの女官が王妃と生まれて間もない乳飲み子を抱きながら、万が一のことを考え、逃げ延びる方策をめぐらした。

騎士も近衛の兵も会食者として食卓を囲んだ領主たちも勇敢に戦ったが、戦うための鎧を身につけた侵入者は、時がたつにつれて有利になり、勝敗はしだいに明らかになっていった。僧や詩人や楽士など武器を持たない者たちは命からがら逃れたが、敵の兵士も含めかなりの屍が館の中に放置された。

最初、敵は覆面をした騎士たちとしかわからなかったが、時がたつにつれて、この国の王ウイリアムの弟ジョンと配下のイシューリンが起こした謀反ということがわかってきた。覆面をした侵入者の中にジョンの家臣とイシューリンの部下がいたからだった。また、正体のわからない多くの兵が混じっていたことも事実だった。

敵が身内だったことが、王妃リディアを絶望の淵に落とし入れた。

王妃は兄のウイリアムと弟ジョンの求婚を受けたが、兄のウイリアムと結婚した。すべては親同士が決めたことだったが、少なからずリディア自身の気持ちも尋ねられたので、優しく、多くの人に愛され、尊敬されていたウイリアムを選んだのだった。ジョンは同じ年の幼なじみではあったが、将来を託す夫としては心もとなかった。時に頼りなさそうなジョンを見ていると、兄のウイリアムとは比べようがなかった。

かすかな月明かりが照らす闇の中を家臣たちと逃れつつ、王妃は夫であるウイリアム王の身を案じた。おそらくは夫も居城で不意をつかれたのではと思ったが、大きな城壁で囲まれた王の館は守りやすい城塞だったことから、無事を願わずにはいられなかった。

振り返ると、火の手の上がった王妃の城館を中心に松明が右に左に流れていた。あきらかに周辺は動転しているように思われ、村の様子を調べるため、使いが放たれた。

時の経過とともに様子が明らかになっていった。夫の王もやはり不意を突かれて、一命を落としたかもしれないとのうわさが村の中に広まっていた。ジョン側の諜報が言わせたのだろうか。王妃には乳母に預けていた三歳になる娘アンがいたが、この日、娘は夫と一緒のはずだった。幼い娘アンを思うと、身を切られるような痛みが王妃の心を支配した。

村人が必ずしも味方とはいえず、王妃主従は、誰にも気づかれることなく、できるかぎり城館から

離れることを考えた。

王妃主従は城館から秘密の抜け道を通り、森を抜け、林を抜け、行く当てもなく、道なき道を急いだ。夜も更け、数人になった主従には、疲れがどっと押し寄せ、広大な草地に積まれた牧草を見つけると誰からともなくその中に倒れ込んだ。

多くの者たちは、この数時間のうちに起こったあまりの激変に熟睡などできるはずもなく、夜が明けるにつれて、昨夜の恐怖から不安がさらに増し、この先のことを案じて、一人、また一人とこれまで付き従ってきた臣下や女官たちが王妃のもとから去っていった。

黒い大きな森

広い草地の外れから、黒い大きな森が続いていた。この時代の森は果てしなく広大だった。

はるか昔から、村人は大きな森や深い泉を神聖なものと考えていた。森は村人にさまざまな恩恵を与えてくれた。栗やクルミ、山イチゴなどの果実、鳥やウサギなどの小動物、また、食用や薬用に使われる蜂蜜。さらに火のたき付けとなる薪や住居に使う木材も提供してくれた。森がなければ、村人の生活はなりたたなかった。

しかし、森の中には、この黒い大きな森のように、村人さえ立ち入ることを拒むかのような恐ろしい森が存在した。

この深い森は村人に、時に底知れぬ恐怖をもたらしていた。森は大きな樹木と低い灌木、鋭いトゲを持った藪などにおおわれていたが、獣道が森の中を走り、恐ろしい獣の存在が村人の進入を拒んでいたのだった。森に入った村人の多くが森の中で迷い、再び村に姿を現さないことから、恐ろしさはさらに増幅され、よほどのことがないかぎり森の中に奥深く入ることはなかった。この広大な森に入ることはそれなりの覚悟を必要とした。

謀反という突然の事態に遭遇した王妃たちは、敵兵に捕らえられるか、森の中に入るか二者択一を

迫られていた。夫の死の確認がとれれば、王妃は迷うことなく森に入ると決めていた。敵はウイリアム王の血を引く乳飲み子の命を奪いかねなかった。

物見の兵が、村々に王妃主従を逮捕するようふれがでていることを知らせたとき、彼女は夫の生死の確認をとることなく、森に入ることを決めた。

そこで王妃はここまで付き従ってくれた臣下と女官に、王妃自身についてくる必要はないと別れを告げた。臣下や女官は別れを惜しんだが、王妃は再起のあることを示しながら、一時の別れと説得した。乳飲み子と王妃だけの逃走なら、森の中では瞬く間の死を意味していたが、王妃は敵の辱めを受けるくらいなら死を選ぶ覚悟をしているようだった。

一人の臣下と一人の女官が王妃と離れることを潔しとしなかった。そして三人と幼子が深い森の中に分け入ることになった。二人の臣下は自分の娘に対するのと同じような愛情をこれまで王妃に注いできたので、王妃に従って森に入ることに躊躇はなかった。

森に入る前に臣下と女官はできるだけ多くの食糧、森の生活に必要とされる衣服や斧、ワナ、弓矢を手に入れた。そして、どこまでたどり着けるか確信のないまま運命を深い森に託した。

ジェームス・ケンジントン

臣下の一人は名をジェームス・ケンジントンといった。王妃リディアの叔父にあたり、若いときから武勇にすぐれ、馬術、槍術、剣術、弓術を得意とし、戦の時は、必ず先陣をきる勇者だった。しかし、この時はすでに四十の半ばを過ぎ、戦場に出ることはなかった。彼はウイリアム王とリディア王妃のよき相談相手として、小さいながらも領地を封じ、勇者に似合った質素な生活を送っていた。すでに妻はなく、大きな木々に囲まれた屋敷に二人の娘と暮らしていた。

ケンジントンは王妃のもとで会食をしていた一人だった。不覚にもケンジントン自身、この日の謀反を察知できなかったが、襲いかかる敵兵を何人も倒した。王妃が無事城館から逃れられたのは多分にケンジントンの力によるものだった。

この突然のウイリアム王一家の不幸に、自身の当然の務めとして、また、王や王妃に対する愛情から、残された王妃と生まれて間もない王子を守り通す決心をした。

森に入る前に、ケンジントンはここまで従ってきた従僕のクロフォードを呼び、必要最小限のことを命じた。クロフォードはケンジントンとともに森に入りたいと願い出たが、ケンジントンは領地に残された二人の娘を助け、できるかぎり領地を守るよう命じた。娘たちには、父は王妃とともに森に入るが、心配しないよう、また、危険が娘たちにも及ぶおそれがあるので、しばらくは亡き母の実家

に身を寄せるようにとも言い添えた。

ケンジントンは、かつて同じような深い森に入ったことがあったので、森に入ることが死を意味するとは思っていなかった。また、村人のようにむやみに森を神聖化することもなかった。

それは若い時だったが、森に入ってからしばらくしてすっかり方向感覚を失い、やがて日が暮れ、闇夜になった。野宿を覚悟し、馬をかたわらの木に繋いだ。火をおこし、簡単な食事のあと、眠りにつこうとしたが、闇夜に徘徊する獣の気配やフクロウやヨタカの不気味な声におびえた馬が、夜じゅう足で地面を蹴っていたので眠ることができなかった。

焚き火を見ながら、どのようにしたら、この森から脱出できるか考えていたとき、ふとある考えから、夜も明けきらぬうちにケンジントンは焚き火を消し、馬にまたがり、強く鞭を使った。そして、手綱を馬の自由にまかせた。すると馬は深い森にもかかわらず、最短時間で森の外に出ることができた。馬のほうがはるかに戻る道を知っていたことにケンジントンは改めて驚き、経験のひとつに加えたのだった。

恐ろしい森

女官アンナはケンジントンの幼なじみだったが、王妃リディアの乳母で、王妃からは母親のように慕われ、城館では王妃から〝アンナ母さん〟と呼ばれていた。ケンジントンのことを誰よりも信頼し、兄のように、また、よき友人として助け合いながらこの年まで共に王と王妃に仕えていたのだった。

二人とも、小さい時から野山で遊んだ経験があり、大人になっても、森や林に入り、野イチゴや山ブドウや桑の実を摘んだり、栗、胡桃などを見つけては歓喜したものだった。そして生活の中でヒツジや牛や馬はいつも一緒だった。

アンナ自身もケンジントン同様、森に入ることに躊躇はなかった。この広大な森の中で生き延びるために、食物をどのように確保するのか、住居はどうなるのか、どんな獣がいるのか、なぜ村人はこの森に入らないのかと自問しながら、これから身にふりかかると思われる様々な事態を想定しつつ、ケンジントンとともに王妃を助け、森の中で生き抜こうと決心した。

森に踏み込む前、ケンジントンはクロフォードに、森で暮らすための最小限度の生活用品を用意させたが、馬とヤギを一頭ずつ手配することも忘れなかった。馬は移動や荷物運び、ヤギのミルクはやがて成長する乳飲み子ために必要だった。乳飲み子が乳母を必要としていなかったのは、母親の王妃自身が授乳を願ったからだった。

森に入っても追っ手がかかることを考えると、森の奥深くまで逃れねばならなかった。しかし、森の中に入るとたちまち困難に直面した。行く手は木々の枝が大きく張り出し、灌木も密生し、イラクサや大きな薮も絶えず行く手を阻んでいたからだった。馬で進むことは容易でなく、獣道しかない森の中では行程もはかどらなかった。

それでも一行は道なき道を探し出し、少しずつ前進した。乳飲み子を抱いた王妃を馬に乗せ、ケンジントンが手綱をとって先を歩いた。ヤギも荷物を背負わされてアンナが引いた。

森の中は馬が簡単に通れそうな広めの獣道は少なく、遠回りをしながら、薮の隙間を探しつつ、木漏れ日から太陽の位置を確認し、奥へ、奥へと歩いた。三人の手足も顔も肌の出ているところはかすり傷が何本も走った。城館を逃れてから三日目、王妃やアンナ、ケンジントンにも一層の疲れがにじみでていた。そのような状態にもかかわらず、ケンジントンは馬やヤギの足跡を消すことも忘れなかった。追っ手に気づかれることを恐れたためだった。

森に入って最初の夜、二日目の夜と、三人は小さな空き地を見つけては、そこで焚き火を囲み簡単な食事を取りながら疲れをいやした。葉陰を通して、夏の太陽がようやく沈み、夜が深まると決まって不気味な獣の足音や息づかい、フクロウのホー、ホーという鳴き声が安眠を遠いものとした。

寝床の周囲は焚き火を切らすことなく、王妃と乳飲み子を中心に左右にアンナとケンジントンが横になった。歩き疲れのためか、やがてまぶたは閉じ、寝息がもれはじめた。しかしケンジントンの眠

りは浅かった。
翌朝、王妃が目覚めると温かい食事がアンナの手によって用意されていた。ケンジントンも連れてきた馬とヤギに餌を与え、焚き火のもとに戻ってきた。ささやかではあるが温かい食事が再び三人を元気にした。食事をとりながらも、アンナは乳飲み子に何度も授乳する王妃を気遣った。

その日の夕刻からだろうか、ケンジントンは背後に得体の知れぬ気配を感じていた。不自然に茂みの葉が動いたり、自然には発生しないかすかな音が聞こえたりした。その不自然さは最初はわからなかったが、馬やヤギの動きがぎこちなくおびえはじめ、動揺しだすと、ケンジントンの背筋に冷たいものが走った。

それは森の中に入る前から、ケンジントンが最も恐れていたことのひとつだった。おそらくはこの森に入った村人の多くが命を失った原因は、この獣のほか思い浮かばなかった。ケンジントンが弓の矢を必要以上にクロフォードに頼んだのもこのためだった。敵はオオカミだと確信した。それは一頭でなく一つの群れだと思われた。オオカミはまずはヤギと馬を狙ってくるはずだった。そしてオオカミとの距離が次第に縮まっていることを確信した。隙があれば襲ってくる。

ケンジントンにとって最も守らねばならないのは王妃とアンナ、それに乳飲み子の命だった。しかしながら、ヤギはミルクが必要となるはずでこれも大切だった。馬も輸送の手段として手放すことはできなかった。

早めに野営したケンジントンは夕刻から夜を迎えるにあたり、焚き火の数を増やした。アンナがケンジントンに「どうして焚き火の数を増やすの？」と聞いた。アンナにはまだ状況がわからなかった。もちろん王妃もわからなかった。

「たいしたことではないが、ヤギを狙っている奴がいるんだ」

「ヤギを狙っている？」

「そう、人間は狙わないと思うが、一応気をつけないとね」とケンジントンはさりげない調子で、アンナと王妃にオオカミの出現を知らせた。

アンナと王妃は恐怖で全身が震えた。

ケンジントンは「まあ、見ててごらん」と言った。このさりげない言葉が女ふたりの恐怖を和らげた。陽が落ちはじめ、闇がさらに支配しはじめると、獣の遠吠えが呼応しはじめた。

漆黒の闇の中、焚き火だけの明るさが一同を照らした。ケンジントンの他はみなおびえていた。深い闇を凝視するとケンジントンは焚き火の明るさの先に赤い二つの眼がこちらをうかがっているのがわかった。その眼は二つ四つと数を増していった。オオカミの攻撃は時間の問題だと思った。

ケンジントンは大きな倒木を背にして焚き火を丸く五個所で燃やしていたが、その内側に馬とヤギを入れた。ヤギが恐怖からか失禁していた。敵の音のない足音が左右に散った。〝来るぞ〟とケンジントンはアンナと王妃に注意をうながし、二人に燃えさかる松明を持たせた。

松明からパラパラと火の粉が落ちる音がした。不気味な静寂の中、ケンジントンは矢をつがえた。

左右に動く赤い二つの眼の間を狙って、静かに強弓から最初の矢を放った。強い弓の弦の振動が闇を揺るがし、矢の突き刺さるにぶい音とオオカミのくぐもったうめきが前方で起こり、藪が激しく揺れた。すぐに二の矢を同じように打ち込んだ。矢羽根がさらに恐ろしいうなりを上げて飛んだ。

空気の流れが一瞬止まった。

かたわらを見ると、アンナと王妃の松明がこきざみに震えている。

ケンジントンは焚き火の中の大きく燃えさかる薪を松明にし、剣を抜き払って、敵がいた場所まで走った。地面の上の血痕が松明に照らし出された。

突然、得体の知れない生温かい息づかいがケンジントンを襲った、と同時に左右から二頭の敵が襲いかかった。瞬時、ケンジントンは抜き身の剣を払った。あまりに突然のことだったが、二頭のオオカミを一瞬のうちに二振りで仕留めた。一頭はケンジントンの足下に落ち、もう一頭はその先でうずくまっていた。他のオオカミは身を伏せ、あとずさりした気がした。この機を逃さず、カッーと威嚇しながらケンジントンはすばやく焚き火まで戻った。王妃やアンナからはもう離れることはできなかった。馬もヤギもまだ無事だった。しばらくの静寂を再び勢いよく燃える焚き火が打ち消した。さらにアンナが枯れ枝を火の中に投げた。パチパチと焚き火がさらに火力を増し、あたりは一段と明るくなった。三人は静かに息を止めてオオカミの次の攻撃を待った。ケンジントンはオオカミたちが剣の怖さを知ればしめたものだと思った。人間の牙はオオカミの牙よりも大きく、はるかに強いことを思い知らせる、これができればオオカミは襲ってこない。

火は一層強く燃えさかった。長い夜の始まりだった。まんじりともせず、ケンジントンは前方を凝視し続けた。しかし、その後、オオカミの気配は薄れていった。剣の牙と火の威力がオオカミを撃退した。

森の中に太陽が差し込みはじめると、オオカミの姿は完全に消えていた。三人の緊張は解け、安堵の表情が互いの顔に浮かんだ。ケンジントンは前方にある藪の中に二頭のオオカミの死骸を、さらにその先に一頭の大きな白いオオカミが矢によってのど元を打ち抜かれているのを確認した。このオオカミがリーダーかもしれないと思いつつ、三頭のオオカミを穴を掘って埋めた。運よく頭目を討ち取っていれば、しばらくはオオカミは襲って来ないだろうと思われた。アンナがケンジントンの腕の傷を見つけ、持ってきた薬草をぬりつけた。ケンジントンは気がつかなかったが、オオカミの牙が当たったのかもしれなかった。

ケンジントンはこれからもオオカミは出るだろうし、さらに森の奥に入る勇気があるかをあらためて王妃とアンナに尋ねた。ケンジントンの武力にも心の強さにも感嘆した王妃とアンナは、森の中で暮らせると頷いた。森の中の恐ろしい経験は二人にさらなる勇気を与えたようだった。

森に入って四日目になると暗い森は明るい背の高い広葉樹の森に変わっていったが、低い灌木とイラクサが相変わらず行く手をさえぎった。さらに広葉樹の森を進んで行くと、突然小川が一行の前に現れた。一同は水の中に顔を浸し、思いっきり水を飲んだ。馬も人間も一緒に飲んだ。この小川を境に、

森の中は比較的歩きやすくなってきた。藪は小さくなり、前に進むことが楽になった。流れに沿って川下に下っていくと、大きな空が葉陰から見えはじめ、驚くような明るい陽光が射し込んできた。ケンジントンは神の恵みと思わざるをえなかった。雨、風がしのげる小屋が造れそうな場所を探しながら、小川に沿って下ると、他の小川が合流して川幅が広くなり、葦の生えている沼に注いでいた。その沼の周囲は草原が取りかこみ、馬やヤギにとって待望の草地に思えたが、水辺を考えるとオオカミの出現も考えねばならず、自由に草を食ませることは危険だった。

また追っ手が来た時に、追っ手の犬を撒くのにこの沼を利用できるのではと思った。ケンジントンは沼を渡って対岸に移れば、足跡も臭いも消せるはずだし、その地が小屋を造るのに適している可能性もあった。そのためにケンジントンは一人対岸を目指して沼の中を歩いた。沼は小川が注ぎ込む淵をのぞいては膝ほどの深さだった。長い棒を二本持ち、この沼が底なし沼であっても対応できるようにした。何度も確認しながら沼を渡った。底なし沼の恐れが十分にある個所もいくつか見つかった。そして翌日、一日かけて、ケンジントンは注意深く、王妃とアンナを対岸まで導いた。そしてこの沼にはケンジントンに無断で入ることを禁じた。ヤギと馬も対岸まで連れていくことができた。

そして月が欠け、満ちるまでの間は沼に近づかないようにしようと決めた。雨も降り、沼は水量を増し、彼らの足跡は完全に消えた。小屋もない三人と赤子の生活環境は最悪だった。クロフォードが手配してくれた袋の食物が彼らを支えていた。

森で暮らしはじめる

沼の対岸、はるか彼方で、犬のほえる声と馬のいななきが聞こえた気がした。瞬時のうちにケンジントンには来るものが来たという戦慄が走った。

当然のことながら、犬の追っ手は必ずかかると思い、ケンジントンは自分たちの匂いを消すために沼を対岸まで渡ったのだった。当然のことながら、沼の水が匂いを消し去るはずだし、優秀な犬でも、沼までは匂いを追えるが、その先を追うことは不可能なはずだと確信していた。

ケンジントンは、王妃やアンナにことの次第を詳しく伝え、しばらく静かにしていれば、兵隊たちは撤退するはずだから心配は無用と伝えた。しかし、念のため、もうしばらくは沼から離れた森の奥に身を潜めようと言った。

数日後、犬や馬の気配が完全に消えると、ケンジントンは追っ手が立ち去ったか否かを確認すべく沼を渡った。そして、その底なし沼の中ほどで、腰から後ろ足をとられ、息も絶え絶えになっている一匹の犬を救った。力なく横たわった犬は、鼻先に置かれた餌のためか、時間とともにかすかに尾を振りはじめた。

沼の周辺には十人ほどの兵隊が二日ほど駐屯した痕跡があった。

ケンジントン、アンナ、王妃の服装はまったくみじめなものになっていった。王妃の服装だけでも

よいものをと思ったが、王妃は明るく笑いながら、食べられるだけでうれしいと言った。その笑い声がアンナとケンジントンを元気づけた。

ケンジントンたちは沼の対岸から戻り、再び沼に流れ込む小川の上流に、住まいとなる小屋を建てる候補地を探すことにした。沼の対岸には安心して飲める清水が見つからなかったからだったし、犬を残して立ち去る慌てぶりから、追っ手はもうこの地には来ないと思われたからだった。

小川の上流を進むと、大きな木々に囲まれて岩山がそびえていた。この岩山に登ると、このあたりで最も高い場所に立つことになる。頂きは比較的広くそのままの高さでかなり先まで続いている。この岩山の最も魅力的なことは、岩の割れ目から、ひとすじ清水が流れ出ていることだった。清水は流れをつくるまでもなく地面に消えていたが、水の消えるあたりまで青々としたクレソンが茂っていた。クレソンを見つけたアンナは葉を採りひと噛みしてクレソンと確認すると、小躍りして王妃に伝えた。王妃も喜んだ。濃い緑の葉と茎はやわらかそうだった。最初の新鮮な野菜が見つかった。

清らかな水が近くにあること、新鮮なクレソンがあること、これらは小屋を建てる上でも大切なことだった。ケンジントンは、岩山の清水が流れ出る岩場の近くに新しい小屋を建てることを提案した。

また、岩山には小さいけれど洞窟があり、三人の人間と馬とヤギがどうにか住める広さはあった。入り口は一カ所なのでオオカミに対しても守りやすかった。そして何よりも雨を凌げたし、小屋のできるまではここで過ごすことができると思った。

不安の中の小屋作り

ケンジントンはふと自分の年齢を考えた。すでに四十五歳を超えているはずだった。それほど若くはない。しかも、幼子が十歳になった時は、五十五歳となる。その時、アンナも五十歳のはずだ。それにそんなに長く生きられるだろうか、多くの者は五十どころか四十を待たずに死んでいる。

王妃はまだ若いが、乳飲み子が立派に育つことは可能だろうか。同世代の友もなく、人との付き合いは三人の大人以外ほとんどない。この子の将来はどうなるのだろうとも思った。

また、現在のこの場所は森に入って約四日で到達した。慣れれば三日、いや二日もあれば森の外に出られるだろう。森の外ではおそらく新しい為政者がわれわれを探しているはずだ。また、前王ウイリアムを慕っている勢力もあるはずだが、そのような仲間とは連絡がとれるだろうか。ウイリアム王の生存も気にかかるが、万が一、王がすでにこの世にいなかったら、王妃の落胆ははかりしれないし、事態は大きく変わってくる。しかし、それもこれも時の経過を待つしかない。とにかくしばらくはこの森の中で様子を見ようというのが結論となった。ケンジントンは強靱そうだったが、たえず先の見えない不安が心を支配していた。

ケンジントンは洞窟での生活を望まなかったので、すぐに新しい小屋作りに取りかかった。今まで小屋など建てたことはなかったが、とりあえず、雨を凌げ、オオカミが侵入できない小屋であればよ

かった。ケンジントンの働きはすさまじかった。大きな斧がなかったので、多くは倒木を利用し、丸太のまま、柱にしたり、床にし、蔓を使って縛りつけた。床は高くして湿気とオオカミの侵入を防ぐようにした。屋根は倒木の皮を何枚もはぎ取り、細い若木の間を通して蔓で固定して葺いた。気の遠くなるような作業でもあった。ケンジントンはこの森の冬がどのくらいつらくなるかを想像し、アンナにも燃やすことのできる枯れ枝を少しでも多く集めるよう頼んだ。王妃も乳飲み子が寝ているときはアンナを手伝った。冬に向かって、家がなく、燃やすものがないことは考えられないことだし、それは確実な死を意味していた。

やがて、しだいに小屋らしきものができてきた。小屋の中を二つに分けた。大きい部屋の片隅に石で四角に囲った炉を作った。炉の中には大きな鍋が置けるようにした。

どうにか雨は防ぐことはできた。ケンジントンはもう一つの部屋を王妃とアンナの部屋とした。沼で救った犬もケンジントンのかたわらで寝た。馬とヤギにも雨のかからない小屋を作った。湿気のあった洞穴に比べるとはるかに小屋は快適だった。床の高さが湿気を防いだのは明らかだった。

またオオカミの小屋への侵入を防ぐため小屋のまわりに柵を作った。穴を掘り、太い杭を何本も大地に埋め込んだ。横木を杭と杭の間に五段の間隔で渡し、蔓でしっかりとしばりつけた。横木にはケンジントンの背丈と同じくらいのしなやかな若木の枝を差し込んだ。そして地面に接する先端を土に差し込み、さらに土をかぶせた。アンナや王妃も土を運ぶ手伝いをした。しっかりした高さのこの柵の中にいると、オオカミが来てもすぐにはオオカミと対峙しないという安心感があった。この柵作り

は小屋を作るのとおなじくらいの大仕事だったが、女たちには心休まる柵でもあったし、幼い子も安心して遊ばせることができそうだっだ。

倹約をしながらも、馬の背に乗せて運んだ大豆など食糧の袋も小さくなってきた。ケンジントンは野ウサギや、沼で見かけたカモをとらえる罠を作った。どれも若い頃、仲間と競って罠を作り、ウサギや鳥を捕らえたころの経験を生かしたものだったが、思い通りの獲物を手にいれることはむずかしかった。それでも食糧の袋を小さくするのを遅らせることはできた。

ケンジントンは冬に備え、今のままでは食糧も持ちこたえられないことを悟り、どうしても一度森を出なければと思った。それは、しばらくの間、王妃とアンナを残して森から出ることを意味していた。留守にする間の食糧を十日分ほどアンナと王妃のために用意すると、ケンジントンは馬と犬を連れて小屋を後にした。

オオカミがいつ出没するかもしれないことから、王妃とアンナが柵の外に出られないことは仕方のないことだった。

クロフォード

馬と犬は不思議なほど一直線に森から出ようとしているかのようだった。途中から、相変わらずイラクサや細い灌木が行く手を妨げたが、見覚えのある大木などを見ると方向に誤りはなかった。ケンジントンは以前から馬はサンダーと呼んでいたが、犬はハッピーと名付けた。ハッピーは以前は違った名前で呼ばれていたらしく、最初はとまどっていたが、やがてケンジントンの口笛にも慣れ、ハッピーと呼ばれると尾を振って一目散にかけつけた。

驚いたことに彼らはたった二日半で森の外れにたどりついた。さらに不思議なことに、この森からの出口は最初に王妃たちと森に入った場所ではなかった。ハッピーがこの森に入った場所だったのだろう。やがてわかったことだが、この森の出入り口はケンジントンの館からもそれほど遠くなかった。

ケンジントンは狩人に変装した。村々には多くの兵隊が駐屯している様子が垣間見られたが、注意深く見ると見慣れない甲冑をつけている兵隊のいることがわかった。ケンジントンは瞬間、これは傭兵だと思った。ノーザンブリアの兵か、それにしても、ジョンはなぜ傭兵などを雇ったのだろうと思ったが、これはジョンの考えたことではないと思った。傭兵ならば、残党狩りと称し、昔の仲間が捕まった場合、捕虜の扱いにも容赦しないはずだと思った。

ケンジントン自身も国ではかなり名が知られていたので、領地に行き着くまで、誰にも会わないよ

う日が沈むのを待った。やがて、日が落ち、闇が人を見分けることをむずかしくすると、ケンジントンは馬に鞭をあて、自身の領地に急いだ。

ケンジントンは王妃と行動をともにすると決心した日、従僕のクロフォードを領地に走らせ、事の次第を二人の娘に伝え、母親の実家に身を寄せるように伝えていたことを思い出した。しかし今は誰が残っているのかもわからず、館はすでに敵の手に落ちていることも考えられた。

村はずれにある領地に入ったとき、月の光だけが館に向かう道を照らし出していた。懐かしい館は大きな木々に囲まれていつものようにあった。館の中には灯がなかったが、サンダーを林に隠し、ハッピーとともに館の裏庭に回ってみた。物音一つしなかったので、用心深く母屋に近づいていった。

暗くても勝手知ったる庭だったが、館の裏口に回った時、突然ハッピーが低く唸ると同時に、ケンジントンの背中に剣先が突き立てられた。

「お前は誰だ！」

聞き覚えのある声だった。ケンジントンはゆっくりと両手を挙げながらきびすを返した。

「クロフォード、わたしだ」

「ああ、お館さま、ご無事で！」

月明かりの中にもかかわらず、日焼けした従僕の目から涙がこぼれ、顔をくしゃくしゃにした。

「クロフォード、元気か？」

「わしたちはなんでもありません。お嬢様方もお元気で、仰せのとおり、亡き奥様のご実家にいらっ

しゃいます」
「ありがとうクロフォード、わたしもこのとおり元気だ」
「わしは、お館さまが、森のどのあたりに入られたのかがわかりませんでしたので、特にお探しもせず、仰せのとおり、この館でお待ちしておりました。お許しください」
「何を言うクロフォード。それでいいんだ」
「お館さま、夜とはいえ外では目立ちます。わしの小屋に入りましょう」
「館は使ってないのか？」
「昼間は使わせていただいておりますが、夜は自分の小屋で寝ます」
「そうか、あまり気を使わんでかまわんよ。館は使ったほうがいいのだから」
「はい、ありがとうございます。でもそれはできません。それから、お館さまと別れてこの館に戻ってから一週間ほどして、兵隊が数人この館にやって来ましたが、その時はお嬢さま方はすでにご実家に移っておりました。それでわしと息子たち以外、誰もいなかったものですから、わしどもが一通りの尋問を受けました。一応お館さまの所在は聞かれましたが、わしらもお帰りをお待ちしているところだと答えました。するとこの館の主は今は誰だ、と言われたので、それはケンジントン様だが、お嬢さまがいらっしゃるので今はお嬢さまかな、お留守だが、と答えました。お嬢さまのことを申し上げてまずかったかなと思いましたが、しらばっくれて、こんな小さな館なんで家来はわしたちだけだ、わしと子供でお館をお守りしとるんじゃ、と小銭を少々持たせてました。奴らは『しけた館だ』（す